

「あんな白い点々見て何が面白いの？」

夢中で双眼鏡で星空を見上げた私は、妹に笑いながらよくこう言われたものだ。

赤ん坊の頃から月が怖くて泣いていたという私だが気がつくると天体の載っている本を親にねだるほどの星好きになっていた。なのに3つ違いの妹は夜空に何の興味も示さなかった。

そんなわけで高校の地学部天文班に入るまで、私はずっとひとりで庭に出て双眼鏡で天体観測をしていた。家からは天の川も見えたがひとりきりで見るのはさみしいものだ。私はなんとかして妹も星好き仲間引き込んでやろうと考えるようになった。

「天の川がきれいだよ！」とよく晴れた夜には庭に誘い出そうとした。でも妹は夏なら虫がいる、冬なら寒いといって出てこない。あまり無理じいするのも逆効果なので、私はひとりでいつも星を見上げていた。

そんな毎日だったから高校での天文班の活動はこの上なく楽しかった。地学室には小さなプラネタリウムがあり、先輩が星座の説明をしてくれた。屋上に行けばいつも大型望遠鏡が置いてあり、太陽黒点のスケッチをしたり、合宿をして皆既月食や流星の観測などをした。授業よりも天文班の活動のために学校に通っていたような日々だった。

しかし2年半の部活もあっという間に終わってしまった。高校を卒業すると地学部部員はみなバラバラになり、みんなで観測、という楽しみもなくなってしまった。私はお金を貯めて自分の望遠鏡を買おう、と心に決めた。キラキラ光る小さな指輪のような土星を見たら、妹もきっと星好きになってくれるに違いない。私は天文雑誌を買いあさり、まずは知識をため込もうとした。

家で天文雑誌を広げていると高校生になった妹がからかいに来る。

「また点の集まりを見てる。そんな手の届かないものを見たってつまらないよ。お姉ちゃんは地上のことには全く関心がないんだものあきれるよ。今何が流行っているかもわからないでしょう？」

妹はファッション雑誌を隣にドスンと置いて、ふふっと笑った。たしかに私は星ばかり見て、特に高校時代はそれ以外のことには全く興味がなく、どんな歌が流行ったかすらわからなかった。

妹も私と話が合わなくてさみしい思いをしていたのだろうか。

ある日私はデパートで星形のブローチを見つけて、それを妹にプレゼントした。実物の星よりまずは星に関するもので共通の話題を作ろうと思ったのだ。妹はブローチを手にとると、わあ、かわいい、と言って胸につけた。しかし星形のものならいくらでもさがしてきてあげるよと言うと、ハート型のほうがいいと言い返されてしまった。

星好きの人間というのは少数派なんだろうか。相変わらず私はひとりで天の川を見つめていた。

ちょうどその頃、庭には盛り土がしてあり、私はそこにシートを敷いてごろんと横になって双眼鏡を持ち、天を見上げていた。家は田舎の田んぼの真ん中にあり、光を発するものはほとんどなく、星を見るには恵まれた環境だった。私はその場所で2時間は星空散歩を楽しんだものだった。

就職してから私は念願の天体望遠鏡を手に入れた。9センチの経緯台。お店の人の話では土星の環もぼちりな入門機ということだった。この望遠鏡は田舎では手に入らず、妹と東京に出かけて買って来たものだった。昭和50年代である。その頃の7万円は大金だった。どしゃ降りの雨の日、その日しか上京の日取りがとれない私に道案内をしてくれていっしょにお店まで行ってくれたのは妹だった。今思うと何から何まで妹に頼りきっていたと思う。

妹はこう言ってくれた。

「土星の環なら見てみたいな」

私は星座早見盤と天文雑誌を持って来て、ほかにも見ることのできる星団、星雲、二重星などの説明をした。妹が笑う。

「お姉ちゃん生き生きし過ぎてる」

ちょうど私が望遠鏡を手に入れた時、南の空には木星と土星と月があった。ある晴れた夏の夜、私は庭の真ん中に望遠鏡を設置して、まず土星に照準を合わせた。

大気のゆれで少しゆらめいた小さな小さな土星が現れた。自分の望遠鏡で見ると、土星もいつもの土星じゃない感じがする。まず家族全員を呼んで親に見てもらった。わあ、と驚嘆の声があがった。「写真とそっくりじゃないか」「不思議よねえ」などとみんな感心してくれた。さあ妹にも見せようとする、彼女はカメラを持ってレースのワンピースを着て現れた。この望遠鏡では星の写真は撮れないんだよ、と言うと、妹はうれしそうに、

「天体望遠鏡をのぞいている私の写真を撮ってほしいの。服も着替えてきたの」

と言った。ピカピカの望遠鏡といっしょに写るのがうれしかったらしい。その写真を友達に配るというのだ。

私は妹に土星の環と木星とガリレオ衛星、そして天上でいちばん美しいといわれているアルビレオを見せた。

「ただの白い点じゃなかったんだね！　すごい！」

妹は喜び、それから私の星の話にも入ってくるようになった。私が望遠鏡をかつぎ出した時は決まっていっしょに表へ出て、星をさがした。彼女はクレーターも大アップで見られて興奮する、と言って自分で望遠鏡の操作を覚え、天文雑誌片手にあちこち星をさがしはじめた。

「お姉ちゃんが夢中になるのがやっとわかったよ」

妹はとてもうれしそうにこう言った。

私は星をながめるばかりで、星の写真は自分で撮ることはしなかった。そのかわり天文雑誌の切り抜きを大事にファイルしていた。ふわりと広がるピンクと青のオリオン大星雲や、赤い北アメリカ星雲、バラ星雲などがお気に入りだった。惑星たちの写真もそろえてファイルはどんどん分厚くなった。

妹とふたりで仲良く星見をするようになってしばらく経った頃だった。妹が重大な病に冒された。妹はすぐに入院になり、星どころではなくなってしまった。ガンだった。

入院先から妹は電話で欲しい本などを伝えてきた。私は星の写真集を届けた。妹は言った。

「お姉ちゃんとふとんをかぶりながら見たふたご座流星群、すてきだった。私あんなに流れ星を

見たのははじめてだったよ。70個くらい数えたよね。またお姉ちゃんと流星群を見たいなあ…
…」

1年半後、妹は亡くなった。私はしばらく空を見上げる気にもなれず、天文雑誌の定期購読もやめて、望遠鏡はほこりをかぶってしまった。

またひとりぼっちで星を見ることになる。そして今度はほんとうのひとりぼっちだ。ふたりして見上げた星々が、涙でゆがんで見るができなかった。

それからどのくらい夜空を見上げなかつただろう。望遠鏡もいつのまにか壊れて物置行きとなった。そのうち日々の生活に追われ、星のことは忘れてしまった。そんな私にある日、テレビから衝撃的な映像が飛び込んで来た。月探査機かぐやからの、月から見た地球の動画だった。

青く美しい地球が、月の地平線から昇ってくる。なんてすばらしい映像だろう。感激で涙があふれた。と同時に、私の星に対する興味が一気に押し寄せる波のように心に戻ってきた。そうだ、私は星を見るのが大好きだったはずだ。なぜ下ばかり向いて歩いていたのだろう。

新しい望遠鏡を買うまでに、そんなに時間はかからなかった。星は、約20年の間、夜空を見上げることを忘れていた私などおかまいなしに、ちゃんと20年前と同じ位置に光ってくれている。

私はまた星空散歩をはじめた。ネットでも星めぐりのできる時代になっていた。星に関するブログも立ちあげ、天文雑誌も買い集めた。

いちばん楽しかった頃の思い出がよみがえる。天体望遠鏡の隣で手を握る妹の笑顔も浮かぶ。私が地上で堂々めぐりをしていたことなど、星たちにとっては一瞬にも満たない時間の出来事だ。

かぐやのおかげで、私の大好きな星の中に地球が加わった。自分の住んでいる星なのに今まであまり気にもとめなかった地球の様々な問題にも感心を持った。美しい地球があるからこそ美しい星々もながめられるのだ。

私は青空もいとおしく思えるようになった。

私が見つめている星々は、この青い星のどこかで同時にだれかが見つめている。様々な想いを胸にして。私はひとりで星空散歩をしているわけではないのだ。

流れ星がすうっと天を横切る。この瞬間、あちこちで歓声があがっているのだろう。かぐやは私に大きな視点を与えてくれた。私は今夜もこの美しい青い星の上から無数の星を見上げる。